

抄物にみられる接続詞

西 本 勝 博

1 はじめに

現代話における、いわゆる接続助詞と接続詞のなかには、同じ形式のものが存在する。

- (1) 電話したけれど、居なかった。

電話した。けれど、居なかった。

(1) では、「けれど」が接続助詞か接続詞かという違いはあるものの、2つの文で内容や意味が異なっているとは考えられない。したがって、この2つの「けれど」の意味は同じであろうと考えられる。この「けれど」のように、同じ形式である接続助詞と接続詞には意味的な対応関係がある。

また、全く同じ形式ではないが、次のような例もこれに準じているといえる。

- (2) 昨日は雨だったから、授業に行かなかった。

昨日は雨だった。だから、授業に行かなかった。

(2) では、接続助詞は「から」、接続詞は「だから」ということで、形式的に全く同じではないが、「だから」は「から」という形態を含んでおり、また、どちらの形式も前件が後件の理由を表している点で、意味的に対応している。

(1)(2) のような、接続助詞と接続詞が同じ形式であるという現象は、山梨(1995)の記述によると、次のように理解される。

- (3) a. 花子がパーティに行くなら、僕も行く。

b. A. 花子がパーティに行くよ。

B: それなら、僕も行く。

c. A. 花子がパーティに行くよ。

B: なら、僕も行く。

(山梨(1995)より引例)

a では、接続助詞「なら」が前件と後件を結びつけているという機能であるが、b・c では、指示語の有無はあるにせよ、いずれも接続詞として独立し、談話標識として機能を変化させていると考えられる。つまり、接続詞は、「先行文に依存した表現から派生した」ものとして捉えられるのである。分かりやすくいえば、接続助詞が切り出されるかたちで接続詞になるわけである。したがって、当然の結果として、意味的な対応関係が成り立つことになる。(※注1)

さて、本稿では、抄物にみられる接続詞、特に「トコロデ」がどういった意味機能をもつのかについて考察を試みたいと思うが、前提として、接続助詞と接続詞の間の意味的な対応関係を上のように捉えることとして、以下進めていくことにする。

2 接続形式「トコロデ」

室町時代における、接続形式としての「トコロデ」については、『日本大文典』に次のような記述がある。

(4) Tocarode (所で) は Fodoni (程に) と同じく理由を示す

往々文又は句の初に Tocarode (所で) だけ用られたものは、かくして、これこれなのでといふ意を示す。(445p)

ただし、当時のいわゆる口語資料といわれるもので、接続詞「トコロデ」の例がみられるのは、抄物だけであってキリシタン文献や狂言台本にはみられない。ともかく、この記述によれば、「トコロデ」は接続助詞、接続詞ともに「理由」を表すと考えられ、前節でみたような意味的な対応関係が成り立ちそうである。以下、先行研究を踏まえつつ、具体的にみていくことにする。

まず、接続詞「トコロデ」についてみると、その最初期の研究であろう湯沢(1929)には、「然るに、すると、故に、などの意」と付されて、次のような例が挙げられている。

(5) コナタヘハマイリ候マイト云ソ處デ三度マデ行レタソ (蒙求一5ウ)

(6) 其ノクジニークジカ出タソ處テ臣下共カ今年バカリ代テ御モチアラウカト云フ
心ニミタソ (蒙求一4オ)

湯沢の記述そのものは、いわゆる「順接」と考えられるが、引例のうち、(5)については、『日本国語大辞典』に、「先行の事柄に反する事柄を述べる」の項、つまり「理由」ないし「順接」といった意味とは異なる例として引かれている。もっとも、これには反論があって土井(1969)には「湯沢氏の前掲書では、順逆の別についての積極的な言及はなされていない」としながら「順接条件を表している」という見解が示されている。(※注2)

しかしまた、坂詰(1975)は、接続詞「トコロデ」について、「逆接的な意味を表わす接続詞として使われることが多い」としたうえで、次の例を挙げている。

(7) 布とはなぜに云ぞなれば、しく心ぞ。宝を通じしく物ぢやほどに云で候。處で
このは料足では何かいだからうぞ。(毛詩抄一302p)

(8) 誰デマリ此國ニ到ル人ニ相見申サヌハナイ殊ニ孔子ノコトハ承及ホトニト云
テ料簡シテ望相看ソ處デヤガテ孔子ノ從カ引付タソ從者ハ弟子孔子ニ從テ行者

このように、従来の研究では、接続詞の「トコロデ」には「順接」「逆接」両方の用法が提出されているわけである。上に挙げた(5)－(8)の「トコロデ」が果たして、「順接」あるいは「逆接」であるのかといった議論は措いておくが、ここから窺えることは、「トコロデ」は「順接」「逆接」どちらにも解釈できる形式であるということだと思ふ。

事実、この他にどちらの用法もみることができる。以下に、『蒙求抄』『毛詩抄』の例をいくつか挙げてみる。

- (9) 同舎郎トハ内裏テノアイ官ソ局ヲ同クシテ居タ人ソ告婦トハ御イトマヲ申シテ
婦コトソ古郷ヘ帰ルトテ金ヲ取チカヘテ入物ヘ入テイインタ處テ同舎ノ郎ヲハ
疑ハイテ不疑ヲウタカウタソ (蒙求抄二39ウ)

- (10) 老姥カ六角ノ竹扁ヲコシラヘテウツタヨ六角ニコソ候ツラウソレニ五字ツ、字
ヲカイタレハ以外腹立レタ處テ義之カ、イタトヲシナレ百銭ツ、セウト云タ
レハアノ如クサウアツテ過分ニ料足ヲ取タト候ソ (同上三22オ)

- (11) 亭主カ馬ヲ失フタカコ、ヘ盗人カ来ソト云テシハレト云タソ馬ト衣裳トヲ取テ
候盗ハセヌト云處テ是ハカクレタ徳カアラウト云ソ指タル事ハナイ是テア
ラウカト云テ語ソ (同上二46ウ)

- (12) 單于トエンシトカ漢ヲ聞テ七日不食テイタソ處テエカキニウツクシイ美人ヲエ
カカセテ夷ノ下ツカサノエンシト云者ノ處ヘヤラレタソ (同上三31ウ)

- (13) シタレハ星カ落テ五十三テ諸葛亮カ死タソ處テ司馬宣王カ取タソ
(同上五6ウ)

- (14) 此時鳥カヒキクサカツテ飛ソ處テ魚カ水底ニ鳥カ在ト心得テ水上ヘアカル處ヲ
取ソ (毛詩抄—17オ)

- (15) 天子カラ云付ラル、程ニソチト行テ征討セウスソ處テ康公ハ王カラハ云付ラレ
ヌ我ト行テセラル、程ニ其ハ曲モノイト恨ルソ (同上六34ウ)

(11) から(15)が「順接」の例、また少数ではあるが、(9)(10)は「逆接」と判定できる。しかし、これらの判定は微妙なものといわなければならない。(※注3) 順接の例では、(4)の記述にあるような「理由」の意味を積極的に表しているとはいえ、基本的には前件の事実のあとに後件が起こるといった時間的な継起関係を表していると考えられる。例えば(11)では、「盗ハセヌト云」という前件の事実のあとに、後件で「カクレタ徳カアラウト云」という事実が起こったという時間的な継起関係を示していると考えられる。

逆接の例も同様で、(9)では、同舎郎が「取チカヘテ」「入テイインタ」という前件の

事実に対して、「同舎ノ郎ヲハ疑ハイテ不疑ヲウタカウタ」という事実が起こったことを示していると考えられる。

そもそも「順接」か「逆接」であるかといったことは、その定義の曖昧さに起因することでもある。したがって、ここでは、ひとまず「トコロデ」の用法について「順接」「逆接」両方の見解を認める立場をとっておくことにする。

さて、接続助詞「トコロデ」は、(4)の記述によれば「理由」を示すのであって、決して「逆接」ではない。しかし、前節でみたような接続助詞と接続詞の意味的な対応関係から考えると、当然、接続助詞「トコロデ」にも逆接的な用法がみられてよいことになる。

そこで、次に抄物にみられる接続助詞「トコロデ」を考察することにするが、その前に、参考として、『天草版伊曾保物語』の例からみてみたい。

(16) エソボ荷奉行に云ふは、「某はまださやうのことに慣れませぬほどに、小怪い荷を下されい」と云ふところで、奉行の云ふは、(以下略) (412-18)

(17) 鳥もまた、「わが前で借ったをば存じた」と云ふところで、検断これを聞いて、「この上は糾明に及ばぬ。羊急いで返弁せい」と一決したによって (以下略) (445-5)

(18) 強敵の獅子王に行き会って互にそれぞれと目と目を見合はせたとところで、狐今のはがれ難ければ、(以下略) (498-2)

これらの例に共通していえることは、前件のある事実のあとに後件の事実が起こるという時間的な継起関係を表していることである。しかし、また同時に、文脈としては、それ以上の意味が付加されているようにも捉えられる。

例えば、(16)の例は、エソボが荷奉行に話したという前件の事実に対して、後件で荷奉行が答えているという内容である。この場合「トコロデ」は基本的には時間的な継起関係を表していると考えられるが、前件において、エソボと荷奉行という人物が提示されていて、そのうちの一人(荷奉行)が後件の動作主であることによって、時間的な継起関係以上の文脈が汲み取れるようになっている。

(17)も同様であるが、この例では後件の動作主である検断の動機が、前件の行動にあるということを「これを聞いて」と明示しており、(16)の例よりも更に前件と後件の間に理由の文脈がよめるようになっている。

また、(18)の「トコロデ」は、時間的な継起ではなく、「ところ」がもつ本来の空間的な場面の意味と捉えられるが、この例にしても前件に狐と獅子王が提示されており、そのうちの狐が後件の動作主になっていることで、同様の文脈を帯びている。

このように、『天草版伊曾保物語』の「トコロデ」は、後件の動作主を予め前件にお

いて提示することや後件において前件を指示する内容を明示することで、前件と後件の間に時間的な継起以上の意味を文脈に与えているわけであるが(※注4)、(16)から(18)にみられるようにある事実を時間的な継起関係で繋ぐのが基本的な用法と考えられる。

では、次に、抄物にみられる接続助詞の例を挙げてみる。

- (19) 太玄ノコトヲツヨウ學シタソ病氣シタ處テ母ガ辛勞シテ無用チヤト云ソ
(蒙求抄三23ウ)
- (20) 来歳一隣ノ者カ祭ヲシタ處テ去年ノ今日死タト云テナケイタソ (同上四5オ)
- (21) 時ニ武帝ヨリ義ナ人テヒルネヲシテ夢ニ人形カ来テ打擲シタ處テ宮中ヲホラセラレタ事ソ
(同上四43ウ)
- (22) 周ノ恒王ノ誠ヲ失ハレテカラ諸侯カ肖タソ王ト諸侯ノ間カ互ニ恨テフシ／＼ニ有タヨ王ノ師ヲ、コイテ諸侯ヲ封シタレハ諸侯カ防イタ處テ是ト戦フタレハ王ノ師カ敗レタソ
(毛詩抄四9オ)
- (23) 上カ恩ヲ施ス處テ下カ報謝スルホトニ君臣合体スル處テ政カヨク行ハル、ソ
(同上九1ウ)

これらの例も、前件の事実のあとに後件が起こる時間的な継起関係である点、そして文脈上にそれ以上の意味が付加されている点で、『天草版伊曾保物語』の例と同様に捉えることができる。特に(21)の例では、前件と後件の動作主が同じであることで、より理由の文脈が強く感じられる内容になっている。

さて、小林(1973)によれば、接続助詞「トコロデ」が「完全に原因理由」を表していると考えられる指標のひとつとして、モダリティ形式が上接していることが挙げられている。

それにしたがえば、次のような例は、「理由」を表していると考えられる。

- (24) 文ハカリアル物テモカナウマイ處テ謝安カヒキシテ申ステハナイ
(蒙求抄一23オ)

(24)のような例がみられる点で『天草版伊曾保物語』とはやや異なるようであるが、これは抄物と『天草版伊曾保物語』というテキストの違い、つまり、「トコロデ」は地の文にしか現れていないので、そもそもモダリティ形式が現れにくいということだと考えられる。(※注5)

さて、以上のように、抄物では「理由」を表している例こそみられるものの、調査の限り逆接らしき例は見出せなかった。この結果は、接続詞との意味的な対応関係からすると、どのように考えたらいいであろうか。

ひとつの考え方としては、時間的な継起関係を表すものが、文脈上「逆接」を示し、

それがたまたま接続詞にだけみられたというものである。もっとも穏当な考えであるが、そうした場合、次のような例が問題となる。

(25) 其以後文字ノ體カ五アル縮字篆字其次隸字草字ソ五カテキタソ處テ司馬遷班固
ハ黃帝ノ史官崔援曹桓ハ古ノ王也トシタソ又徐整ハ神農ト黃帝トノアワイニイ
タトシタソ (蒙求抄四15ウ)

(26) 父死一錢カ借テ葬送ヲスルソ返サウヤウハナイホトニ奴婢ニナツテ永代ツカワ
レウホトニト約束シテ其テ葬送シタソ處テ道テイカニモミサマヨイ女房タソア
レノ女房ニナラウト云タソ (同四64ウ)

(27) 左傳桓十五年ニ天王使家父來求車是ト同シ者チヤソ處テ植公十五年ノ家父ト幽
王ノ死テカラハ七十五年ニナルソ (毛詩抄十二1オ)

これらの例では、一見して前件と後件に脈絡がみられない。(26)の例は、時間的な
継起関係と捉えられることから、敢えて「順接」といえなくもないが、前件に提示され
ていない人物が後件で登場する点で唐突な印象を受ける内容となっている点で、先の
(10)から(15)の例とは異なる。また、(25)(27)になると、もはや前件と後件の間
に時間的な継起関係を見出すことはできない。すなわち、これらの例では、接続助詞
「トコロデ」には還元することができない内容になっているのである。したがって、こ
こに、接続助詞にはない、接続詞独自の用法なり機能を想定する必要があると考えられる。

では、こういった接続詞「トコロデ」の機能を考える上で、そもそも抄物にみられる
接続詞はどういった性格を有しているのか。そして、「トコロデ」はどう位置付けられ
るのかを、次に考えてみることにする。

3 指示語系と無指示語系

抄物にみられる接続詞の特徴として、従来指摘されてきたことは、複数の構成要素か
らなる複合接続詞が多くを占めるということ、そして、そのなかには、指示語を構成要
素とする接続詞が存在するにも関わらず指示語の無いかたちの接続詞が多くみられる、
といったことである。指示語をもつかたちと無いかたちというのは、例えば、現代語で
も(3)の「それなら」と「なら」のようにみられるものである。

ここでは、仮に、指示語のあるかたちを指示語系、無いかたちを無指示語系(※注6)
とよぶことにする。

ここでは、無指示語系とそれに対する指示語系の用法について2つの間に差異はない
のかという観点で考察したい。取り敢えず2つのパターンを考え、それぞれの考察の対
象として、「アレドモ」－「サレドモ」と「ホドニ」－「サルホドニ」を取り上げる
(※注7)。

まずは、無指示語系「アレドモ」とその指示語系「サレドモ」についてみてみることにする。

「サレドモ」と「アレドモ」は、逆接の接続助詞「ドモ」を構成要素にもっており、基本的には、どちらも逆接を表すと考えられる。どちらの例もみられる『史記抄』から用例を挙げてみる。

(28) 何昇而告トハ言イクラホトカ泰山ニ望シテ柴ヤイテ上天ニ告タト云事ハアルラ
ウ数ヲ知ルマイソアレトモ古昔カ亡シテナイホトニ不知テコソアレナニカ帝王
ノナイト云事ハアラウソ (史記抄二21オ)

(29) 孔子モイカイカツヨチャソアレトモ徳ニカクレテ人カ不知ソ (同上ー〇46オ)

(30) 其兵法ハ世ニ多イホトニ云テ用カアラハヤチャホトニ不諭ソアレトモ其行事ノ
施設ケタル事ヲハ諭スルソ (同上ー〇36オ)

(31) 星ハ夜モ晝モクルリノト轉移スルテコソアレ天ニハアルソサレトモ日光カ盛
ナルニヨツテ晝ハ不見ソ (史記抄六74オ)

(32) 三國ノ内蜀魏兩國ハ早亡テ呉ハ其後久ク保國タソ然トモ晋ヤカテ出キタソ
(同九3ウ)

(33) カ、ルヨイ資ヲモ良工ノ見ソコナウコトカアルソサレトモ天下ノ名器チャソ
(同一一36ウ)

(28) から (30) が「アレドモ」の例、(31) から (33) が「サレドモ」の例である。この「アレドモ」－「サレドモ」については、小林 (1981) (1982) に考察がある。そこでは『景徐聞書』の例を「逆接の強弱」によって区別している。すなわち、「アレドモ」は、「アレが、その状態を表わす補助的用法の如く働く」ことによって「一応前件を認めつつ」逆接するという形式であり、一方「サレドモ」は「アレドモ」に比して、「前件・後件をストレートに逆接の関係で捉えている」としている。この指摘は、『史記抄』の例では、次のように捉え直すことができるのではないだろうか。すなわち、「サレドモ」は前件の事実内容を承ける逆接であり、一方、「アレドモ」は前件の発話を承ける逆接ということである。具体的にみていくと、「サレドモ」の例である (31) で、後件の「晝ハ不見」と逆接関係にあるのは、前件の星が「天ニハアル」という事実である。(32) (33) についても同様で、後件の「晋ヤカテ出キタ」「天下ノ名器チャ」と逆接関係にある前件の部分は、それぞれ「久ク保國タ」「見ソコナウコトカアル」という事実内容である。

一方、「アレドモ」の場合、前件はある事実可依拠しつつも、話者の意見としてなされているという傾向がみられる。つまり、(28) では「知ルマイ」、(29) では「イカイ」「ツヨチャ」という表現から、前件が話者の意見であるということが分かる。そして、

後件では、前件の事実内容よりも、その発話の事実に対しての内容となっている。

また、(30) では前件の「不論」という意見に対して、後件で「論スル」といつているわけで、発話の内容よりも、発話の事実を焦点にしていることが分かる。

この傾向は、『蒙求抄』『毛詩抄』においても確認できる。

(34) 此ハ表明ノ義ニ取ソ言ハ毛長カ傳カヨイソアレ共傳ハ辭スクナテ学者カ心得ニ
クイホトニ毛長カ心ヲ表明シタト云義ソ (毛詩抄一5オ)

(35) 一義ニ祿号衣号トコソヨマウスレ於字ヲライターニヨミ事ハエココロヘヌソア
レトモ此義ハヨウモナイソ (毛詩抄二7オ)

(36) 衆謂ノ晩暮ト云ハ史官セウス物チヤカラソイ人ツヤト云ソサレトモツイニ隠居
シテ終ヘウト思フソ (蒙求抄一8オ)

(37) 甲ハカウト共ヨロイトモヨムソサレトモヨロイカ本ソ (蒙求抄一23オ)

「アレドモ」の例である『毛詩抄』の(34)は、前件で「毛長カ傳カヨイ」という意見を述べているが、後件でそれに対する「心得ニクイホトニ」という理由がある。また、(35)の「此義ハヨウモナイ」も「エココロヘヌ」という意見に対するものと考えられる。

『蒙求抄』の「サレドモ」については、それぞれ前件の「ヲソイ人ツヤト云」「ヨム」という事実内容に対して「ツイニ隠居シテ終ヘウ」「ヨロイカ本ソ」という事実を示している。

このように、「アレドモ」「サレドモ」は指示語の有無によって、ある種レベルの逆う接続をおこなっていると考えられる。勿論、すべての用例が、この区別に収まるわけではないが(※注7)、逆に言えば、「サレドモ」を用いることで前件の事実内容を承けている、「アレドモ」を用いることで前件の発話を承けているという効果的な区別があったのではないかと考えられる。

(38) 李徳載ハ何嘗ヲ見テカ注シツラウ出處ヲ不引カ遺恨ナソサレトモソ

(史記抄九73ウ)

例えば、(38)では、「遺恨ナソ」という意見を述べているが、「サレドモ」で承けていることで、後件の「徳載ヲ出處トシテ可用」は、「出處」が「不引」だという事実に対する逆接だと考えられるわけである。

次に、無指示語系「ホドニ」と指示語系「サルホドニ」(※注8)についてみる。

「ホドニ」は『日本大文典』に「動詞の後に置かれた Fodoni (程に) は理由を示し、Niyotte (に依って) と同意である (455p)」とあり、室町期においては、「理由」を表す接続形式であったことが知られる。したがって、接続詞「ホドニ」も、またそれを構

成要素に持つ「サルホドニ」も、基本的には理由を表していると考えられる。

- (39) 物ノ本ヲ書ニ料紙ヲ黄ニ染タソ程ニ書損シタ時雌黄ヲヌルソ (蒙求抄二23オ)
(40) 太常ハ天子ノ代ニ宗廟ヲ祭ル者ソホトニ潔齋スルソ (同四20ウ)
(41) 殷ノ王者ノヲ、イ中ニ天ニシタカウタモアリシタカウヌハトツテノケラレタソ
程ニヨクヨクミラレイソ (毛詩抄一六5オ)
(42) 文王ノ死レタハ受命七年メソサウシテ八年ニ位ニツイテ十三年メニ紂ヲウタレ
タソ程ニ五年ヲ得ト云タソ (同一九29オ)
(43) 安ハ一ノ衛門ノ賤ニ居タレ共其名ハ第ノ任ノヲモキ方ヨリ出タト云也イヤシイ
門内ニ居タレ共名ハ貴ソミキントヨムソ漢ノ代ニハ左ヨ右ヲ貴ソサル程ニカウ
云ソ (蒙求抄一12ウ)
(44) 骸骨ノ下ニ未問姓名ニト本傳ニアルソ名ヲ問ヌマニ死タトアルソ去ホトニ名カ
ナイソ (同二46オ)
(45) 是ハ漢ノ臣下ソ司徒ノ官マテナツタ是ヨリ上ヘ舉コトハイヤチヤト云テアカラ
ヌソ又一義ニ不進爵人ニ爵ヲモス、メスウケカワヌ體ニテイタソ帝モ氣ニアワ
ヌソ天道ニ應シテ位ニツク去ホトニ臣下皆ウレシカル、ソ (同四7オ)
(46) ナセニ黄一ト云ソト云ヘハ水ニカツ若ハ土ソ土ノ色ハ黄ナホトニ黄ナ頭巾ヲキ
ル去ホトニ黄一ト云テ候ソ (同四29オ)

(39) から (42) が「ホドニ」、(43) から (46) が「サルホドニ」の例であるが、このふたつの違いは、後件が承ける、前件の範囲が異なっている点にある。

(39) の「ホドニ」では、後件「雌黄ヲヌル」は「ホドニ」の直前の文にある「料紙ヲ黄ニ染タ」という部分だけを承けていると考えられる。一方、(44) の「サルホドニ」では、後件「名カナイ」が承けているのは、直前の文「名ヲ問ヌマニ死タ」だけでなく、もうひとつ前の文「未問姓名」をも承けていると考えられる。このように、「ホドニ」は直前の部分だけを承けているのに対して、「サルホドニ」は前の複数の部分を承けている。つまり、「ホドニ」「サルホドニ」では、前件を承ける範囲が「ホドニ」の方が狭く、「サルホドニ」の方が広いわけである。しかし、承ける範囲が異なるからといって、「アレドモ」と「サレドモ」におけるような、接続のレベルが異なっているといったことを意味しているのではない。

では、無指示語系「トコロデ」(※注9)はどちらのパターンであろうか。(11) から (15) の例をみると、「トコロデ」は、直前だけを承けていると考えられ、また、接続助詞に還元できるため「ホドニ」と同様に考えられるが、(25) から (27) のような例を理解するうえでは、「アレドモ」のような、発話そのものを承けていると考えるのが

いいようである。

金田（1976）では、東国資料である洞門抄物にみられる、理由を表す接続詞「トコロデ」についてその発生の起源を接続助詞「トコロデ」からの類推、つまり原理としては第1節でみたような案が提出されている。東国資料においては、接続助詞「トコロデ」の理由を表す用法が確立されているという報告があり（※注10）、接続助詞と接続詞との意味的な対応関係において、この意見は妥当であると考えられるが、ただ、重要なことは接続助詞と接続詞の意味用法が互いに作用しあうことと、接続助詞とそれが前件から切り出されるかたちで独立した接続詞とが機能的に一致するかということは別だということである。

4 おわりに

抄物にみられる接続詞について述べてきたが、以上の議論を接続詞そのものの問題として捉えなおすと、接続詞の分類に際していくつかの異なるレベルが存在することが考えられる。例えば現代語の「ところで」は「話題を転換する」機能をもつが、前件と後件の意味関係を示す「順接」「逆接」といったものとは明らかに性質の異なるものである。言うならば、発話そのものを受けているわけである。現代語の「ところで」が（25）から（27）のような「トコロデ」に直接選ばれるかどうかは、後の調査が必要だが、どちらも発話そのものを受けているという点で共通性をもつと考えられる。

最後に、今回、小林（1982）におけるような資料間の文体の差異については考慮に入らなかった。今後、東国洞門資料における方言による違いも含め、個々の資料における傾向を捉える必要があると思う。

注

- （1）甲田（1996）では、接続詞側からみて、「つまり」「だから」などの「注釈」、「さて」「ところで」などの「転換」には、対応する接続助詞がないという。
- （2）（5）は、湯沢では、「一行ンタン」とあるが、ここでは土井（1969）の訂正による。
- （3）とりあえずの判断を示しておく、『蒙求抄』17例（順接10例・逆接3例・不明4例）『毛詩抄』19例（順接15例・不明4例）となる。
- （4）こういった様相が、小林（1973）では、原因理由とも「偶然確定条件とも区別のつきがたい」用法として捉えられている。
- （5）上接語の種類を示すと、『伊曾保』43例は、（ル形14例・タ形29例）『蒙求抄』32例は、（ル形7例・タ形22例・マイ1例・ナンダ1例・形容詞1例）、『毛詩抄』24例は、（ル形12例・タ形10例・否定又2例）となる。
- （6）抄物に無指示語系がみられる理由として、坂詰（1975）には、「単調な文構造」において「説明を適確かつ論理的に行なうために」「意識的かつ流動的に作り出された」という文体的な面

からの指摘がある。また、山口（1981）では、「句的対象化」という観点から成立の過程についての考察がある。

- (7) 『史記抄』では、「アレドモ」43例（発話を承けている32例・事実内容を承けている7例・どちらとも4例）「サレドモ」62例（事実内容を承けている39例・発話を承けている19例・どちらとも4例）となっている。また、前件句の種類を示すと、「アレドモ」は、（名詞7例・ル形10例・タ形9例・打消ズ2例・ヌ1例・形容詞7例・チャ1例・ヨウナ2例・マイ1例・推量ウ1例・意志ウ1例・サウスレ1例）、「サレドモ」は、（名詞4例・ル形5例・タ形7例・ナリ11例・ベシ5例・打消ズ6例・ナイ4例・形容詞7例・チャ1例・ヨウナ2例・マイ1例・推量ウ1例・ヨ2例・ゾカシ1例・カ2例・トモ1例・文中2例）
- (8) 「ホドニ」は、『蒙求抄』8例『毛詩抄』27例みられる。小林（1982）によると、「サルホドニ」には「説明を展開するにあたって発語的に発せられる」用法がある。『蒙求抄』でも全46例のうち、3例ほどみられる。
- (9) 無指示語系「トコロテ」に対する指示語系のかたちは抄物にはみられない。
- (10) 小林（1973）や金田（1976）を参照。

テキストは、それぞれ土井忠生訳『日本大文典』三省堂、『蒙求抄』『毛詩抄』は抄物資料集成。『天草版伊曾保物語』の翻字は、大塚光信校注（1989）再版『キリシタン版エソボ物語』角川文庫による。

参考文献

- 金田弘（1976）『洞門抄物と接続詞』『洞門抄物と国語研究』桜楓社所収
- 甲田直美（1996）「接続詞とメタ言語」『日本語学』15-11
- 小林千草（1973）「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94
- （1981）「抄物の接続詞—その有する性格—」『国語と国文学』58-5
- （1982）「泉徐開書『接続詞』」『国語学』3
- 坂詰力治（1975）「抄物の接続詞について」『国語学』14
- 土井洋一（1969）「ところが」項 松村明（編）『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社所収
- 比毛博（1989）「接続詞の記述的な研究」『ことばの科学2』言語学研究会
- 山口亮二（1981）「接続形式の分析化—判断の対象化を中心に—」『国語と国文学』58-5
- 山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房
- 湯沢幸吉郎（1929）『室町時代言語の研究』大岡山書店
- （にしもと かつひろ 岡山大学大学院修士課程）